



第24号

🍀 「葬送のフリーレン」に思う

緩和医療科科长 井上 彰

昨年はコロナ禍における緩和ケア病棟の決意をしたためましたが、この原稿を書いている 2021 年夏の時点で巷の状況は昨年以上に深刻で、緩和ケア病棟も少なからず影響を受けています。しかし、ここはあえて以前のようにお気楽なマンガ談義を始めることにします（他者と接触せず独りの世界にひたれるのは、このご時世にうってつけの趣味と言えます）。



「マンガ大賞 2021」にも輝いた「葬送のフリーレン」（山田鐘人原作・アベツカサ作画）は、4 人組の勇者ヒンメル一行が魔王を倒すというドラクエ世代には説明不要の舞台背景（オリンピック開幕にドラクエが流れたのは嬉しい驚き）ですが、本作品は魔王征伐後から物語が始まるのが斬新。1000 年を超す寿命を持ち、人間と全く時間概念が異なるエルフという種族の魔法使いフリーレンが、10 年間旅を共にした仲間たち（ヒンメルともう 1 人の僧侶は人間、戦士の 1 人は人間よりは寿命が長いドワーフ）との死別を経て、今という時間の尊さに気付きます。僧侶から託された魔法使い見習いの少女（人間）の成長を温かく見守る一方で、彼女も自分より早くこの世を去ることは確実であり、その

看取りに際してフリーレンは何を思うのかと切なく感じられます。

とは言え、エルフと人間ほどの差はなくとも、我々の誰しも（無自覚に）与えられた異なる「期間」を生きているわけなので、これは普遍の真実を扱った物語です。（今のコロナ禍のように）ほんの少し前には当たり前だった幸せが消えてしまうこともある。親しくしていた人と次に会えることはないかもしれない。まさに「一期一会」の心構えで今を生きることの大切さが、ユーモア溢れるエピソードを通じて押しつけがましさなく感じとれます。例えば、フリーレンは美味しい料理に出会おうと「食いだめ」をします。次（彼女の感覚では短い数十年後）に同じ店を訪ねた際、同じ味に出会える保証はないからです。このマンガが 10 代の読者を中心とする少年誌（「タッチ」や「うる星やつら」を輩出した少年サンデー）で連載されていることは非常に意味のあることのように思います。

フリーレンが目指している北の地（恐山ではありません）では、亡くなった人と話せるとされています。そこに辿り着いた時、彼女は多くの気づきを与えてくれたヒンメルとどのような話をするのでしょうか。ただ、我々にはそのような機会はなさそうなので、目の前の人に伝えたい想いはすぐに伝えの方が良さそうです。その人が目の前に居てくれる今のうちに。

今年の4月より緩和ケア病棟に配属となりました。

私は、2008年から5年間この病棟で勤務させていただき、患者さんの価値観を大切にしたいという看護について教えていただきました。今回、自分を成長させてくれたこの病棟でまた勤務できることがとても嬉しいです。

緩和ケア病棟の静かな雰囲気と家庭的な木目調の病室、手入れの行き届いた草花や季節感のある装飾品が患者さんやご家族を迎えてくれるこの環境は私の癒しの場所でもあります。

しかし、昨年の年明け頃からのCOVID-19感染が今年になっても落ち着かず、4、5月には緩和ケア病棟を閉めることとなり、緩和ケア病棟の患者さんは他の病棟でのケアを継続させていただきました。この間、先生のラウンドに同行して患者さんが少しでも安心して過ごせるよう関わらせていただきました。そして、6月1日に半分の病床ですが再稼働することができました。昨年のCOVID-19感染により病院内の面会禁止は継続です。当病棟は患者さんやご家族が少しでも一緒に過ごすことができるよう面会人数の制限はありますが、感染に注意しながら面会していただいています。患者さんやご家族から「ここに来て、会うことができてよかった」という話を聞き、この時期にこの病棟が提供できてよかったと思いました。

これからも患者さん、ご家族にとって大切な一日を苦痛なく穏やかに過ごすことができるようお手伝いさせていただきたいと思います。また医療者にとってもこの病棟がホッとできる場所であるよう環境を作りたいと思います。

そして、一日でも早くCOVID-19が収束していつも通りの日常生活に戻ることを願っております。

どうぞよろしくお願いいたします。



緩和医療科 珠蘭 其其格

今年の春から緩和医療科に勤務しております内科専攻医の珠蘭と申します。

3ヶ月間緩和ケアチームに所属し現在病棟勤務とさせて頂いております。チーム勤務期間中、看護師や薬剤師、栄養士、作業療法士など、多くの方々と関わり、薬剤のみならず、きめ細かい症状緩和に関して勉強することができました。病棟勤務ではアドバンス・ケア・プランニングなどを含む最新の緩和医療を学ぶことができたかと思っております。緩和医療についてはまだまだ初心者であり、日々の出会いを感謝しながら精進して参りたいと思っております。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

緩和医療科 鳴海 茜

今年の4月より緩和医療科で勤務させていただいている鳴海茜と申します。

呼吸器内科を専攻しており、がんの患者さんや肺炎の患者さんたちと接している中で、終末期医療や緩和ケアの重要性や難しさを感じ、勉強させていただくために東北大学緩和医療科に来ました。

患者さんやご家族さんとたくさんお話しさせていただく中で、今までの人生のお話や考え方を聞かせていただき、病気のことだけではなく、自分にとってもこれからの人生の糧となるようなことを沢山教えていただいております。

未熟者ではございますが、患者さんやご家族さんにとって良い医療を提供できるように努めてまいりますので、これからもどうぞよろしくお願い致します。



緩和医療科 小池 輪太郎

はじめまして、小池輪太郎と申します。2021年10月から東北大学大学院博士課程に入学して、緩和医療科に配属になりました。医師になってからは北関東で消化器外科医として癌の治療を中心に行ったり、米国ニューヨーク州で膵癌の早期発見に関する研究などに従事してきました。紆余曲折を経てですが、現在は患者さんと御家族の大切な時に真摯に向き合える医療を実践出来るよう勉強させて頂いています。そんな日々の中にある疑問や不都合を抽出して研究に結び付け、その成果を臨床に還元できる”輪”を作れるように目指していきます。まだまだ未熟で至らない点が多く、コロナでご不便をお掛けしますが、宜しくお願いします。

緩和医療科 池田 春香

今年度9月より東北大学緩和医療科に入職いたしました池田春香と申します。

私と緩和医療の出会いは、この大学病院で初期研修医をしていた時になります。初期研修医の多くは特定の診療科に所属せず、研修期間の中で自分の将来進む診療科を決めていきます。私はなかなか将来の診療科を決めることができず、様々な科を研修しながら、ひたすら悩みの中に囚われていました。

そんな折に、この東北大学緩和医療科を研修させていただき、緩和医療というものの奥深さに出会うことになりました。緩和医療分野では患者さん方の苦痛と真正面から対峙し、その改善に取り組めます。ほんの些細なことでも、患者さんが不快に思っているならば苦痛として扱い、それを取り除こうと力を尽くしている緩和医療の在り方は、強く印象に残りました。そして私もその一員になりたいと志すに至り、緩和医療科の門を叩きました。

まだまだ若輩者で至らない点もたくさんありますが、精一杯学んで研鑽を積み、患者さんにご家族の皆様へ還元していけたらと思っています。よろしくお願いいたします。



看護師 大沼 美智子

私は今年度4月から緩和ケア病棟に配属されました。が、コロナ感染症の影響により、緩和ケア病棟は一時閉鎖され6月から稼働再開されたため、実際は7月中旬から勤務しております。どうぞよろしくお願いいたします。

以前（10年以上前になります）緩和ケア病棟に勤務していたことはありますが、概況やシステムなどが変わっており、戸惑うことばかりですが、皆様にご指導いただき、また、支えていただき感謝する日々です。変わらないことは、緩和ケア病棟が目指していることは、限られた時間を過ごすご本人とご家族の苦痛を緩和し生活を支える、ということを実感しており、そのケアを続けられるよう自分の中の情報や知識を Update していきたいと思います。現在は、再病棟編成のために他部署に勤務している仲間がいますが、全員揃って一つのチームとして稼働できるよう一日でも早くコロナ感染症が収束することを願います。

看護師 上舘 紀子

今春より、西17階病棟へ異動となりました。これまでの看護経験をとおして、緩和ケアを深く学びたいという思いが大きくなり、緩和ケア病棟への異動を希望しました。4月から異動となるはずでしたが、昨年から蔓延している新型コロナウィルスへの対応で、緩和ケア病棟がいったん閉鎖となり、6月の再稼働から緩和ケア病棟で患者様のケアに臨んでいます。そして、この原稿を書いている8月末、ふたたびコロナ対策で、西17階病棟を離れています。

感染症対策のため、厳しい面会制限が行われるなかで、患者様・ご家族が面会できる時間がとても貴重なものであることを痛感しています。病院での療養に様々な制限がつかなかで、患者様・ご家族が大切な時間を安心して穏やかにすごせるよう、少しでもお手伝いさせていただきたいと思っています。



看護師 篠崎 麻子

新人の頃にがん患者と関わったことをきっかけに、「患者さんがより良く最期を迎えるための援助がしたい」と思うようになり、いつか緩和ケアについて深く学びたいと考えていました。そんな中、異動のタイミングがあり、4月より緩和ケア病棟に配属となりました。まだ異動して日は浅いですが、経験豊富な医師やスタッフと一緒に働くことで日々多くのことを学んでおります。専門的知識はもちろんですが、患者・家族とのコミュニケーションスキルや安楽なケアの提供方法、患者さんに対する姿勢など、さすが緩和ケア病棟のスタッフだなと尊敬することが多く、わたしも日々スキルを盗もうと必死です。

COVID-19の対応により落ち着かない毎日ですが、いつかこのような状況が落ち着き、患者さんも家族も安心して生活できる日がくることを祈っています。

看護師 藤原 愛子

4月より配属されましたが、コロナ禍のため実際には6月下旬頃よりお世話になっています。緩和病棟に配属される前は外来に勤務していました。病棟は窓からの景色が本当によく、北側、南側にそれぞれ趣があり、それだけで癒されます。また、家族であればごく自然に行うこと、例えば誕生会を開いて一緒にお祝いすることなどは、私にとってとても新鮮に感じました。

外来では日々業務に追われていたため、そのギャップに戸惑いを感じることもありましたが、患者さんと向き合う時間を大切に看護にあたっていきたいと思います。



看護師 油井 美紀

この春から緩和ケア病棟に配属になりました。コロナ禍で、他病棟でのスタートとなりましたが、6月に病棟が再開され、ようやく環境に慣れてきたところです。

これまでがん看護に携わる中で、患者さんご家族が病気を診断されてからたくさんの苦難を体験し葛藤しながらも、精一杯一日一日を大切に生きる姿をみせていただきました。緩和ケア病棟で過ごすことを決断されるに至る過程にもさまざまな思いがあったことと思います。患者さんご家族のそのような思いに心を寄せながら、看護師として自分にできることを常に考え、その人らしさに寄り添ったケアを提供できるよう、誠実に丁寧な看護に努めていきたいと思っています。

栄養管理室 田口 雄也

2019年に入職してから先輩管理栄養士とともにサポートティブケアチームや緩和ケア病棟で栄養・食事面でのサポートをさせていただいております。私自身、管理栄養士として未熟で、悩みや不安が絶えませんが、患者さんの「美味しかった」、「また食べたい」という声に日々救われ、励みになっております。

私事ですが、今年の1月に長年同居していた祖母を亡くしました。祖母の訃報を聞いた時、何も考えられませんでした。最初に頭に浮かんだことは「最後の食事は何だったかな。」でした。別れは突然で何気ないひと時がいかに大切かを知り、より一層ひとの最期に関わる仕事の責任を痛感いたしました。

管理栄養士は、身体的な痛みを取ることはできませんが、食事への苦痛を軽減するお手伝いにより食を通して「癒し」や「喜び」を感じるきっかけになればと考えています。これからも、患者さん一人ひとりの「食べたい気持ち」に寄り添って、「美味しい」時間を大切に食事をお届けしていきたいと思っています。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。



コロナ禍の緩和ケア病棟で想うこと

臨床宗教師 金田 諦晃

私はお坊さんとしての修行時代に出会った一人の老僧から紹介頂いた一冊の本がきっかけで緩和ケア（医療）の分野に興味を持つようになりました。その本のタイトルは『ひとはなぜ、人の死を看とるのか』というもので、沢山の患者さんを看取りに関わってこられたお医者さんが書いた本です。この本との出会い、そして緩和ケア病棟を利用する、患者さんやご家族との出会いを通して、人が人を看取る、あるいは看取られるという営みの意味について考えるようになりました。

さて、世界の多くの文化の中で、人の「いのち」は、「息」との関連で捉えられることが多いようです。たとえば、英語圏ではくしゃみをした人に、魂が抜けてしまわないように「Bless you!（神のご加護がありますように）」と声をかける習慣があるようです。日本語でも、「いのち」という言葉の語源を、「息力（いのち）」としたり、「息内（いのち）」とする説もあるようです。たしかに、私たちが日常的に使っている「息子」や「ご息女」、「ご子息」といった言葉にも「息」が使われていたり、最期の瞬間を「息を引き取る」と表現することもあります。

この「息を引き取る」という言葉、もう少しこだわってみていくと「引き取る」という言葉には、「引き受ける」や「引き継ぐ」という意味があるようです。人が人を看取るということは、それぞれにとって、人生における最も辛い、悲しい出来事でもあると思いますが、一方で、旅立つ人の「息（いのち）」から何かを引き受ける、引き継ぐという、厳粛で尊い時であることも意味しているように思います。引き受けるもの、引き継ぐものは、生物としての「いのち」だけでなく、「物語としてのいのち」であるかもしれません。それらは思いを巡らして気が付くこともあれば、気づかずに私たちの中に溶け込んでおり、人生のふとした瞬間にハッと気が付くものでもあるかもしれません。私自身、これまでご縁を頂いた患者さんを振り返る時、何をしてさしあげたかよりも、何をしてもらったかの方が多くのことを思い浮かべられます。

私は昨年の初夏から晩夏にかけて、祖父母を亡くしました。不思議なもので、この一年をかけて、生前には気づくことが出来なかった、祖父母が私に残して逝ってくれた沢山の思いに気がつかされています。祖父母が残していったそれらは、悩みにぶつかった時の私の支えでもあり、どう生きるかをみつめる時の道しるべにもなっています。おそらく、私たちの一人ひとりの人生物語は、私たちよりも先にこの世から旅立った人も含めた、多くの人との関わり合いの中で生まれ、そして、私たちもこの世から離れる時は、誰かの物語の一部となっていくのではないのでしょうか。

コロナ禍において、会いたい人に会えない時間を過ごさざるをえない方をお見かけする度に、このような営みが否定されるような気持ちになり、心が痛みます。一刻も早く収束し、平穏な日常が戻ってくることを願っています。

診療統計

対象期間 2017 年 (2017 年 1 月から 12 月)
 2018 年 (2018 年 1 月から 12 月)
 2019 年 (2019 年 1 月から 12 月)
 2020 年 (2020 年 1 月から 12 月)

	入院数	在院日数	死亡退院数	稼働率	待機期間数
2017 年	262 人	23.7 日	196 人	75.6%	
2018 年	280 人	21.7 日	211 人	74.9%	8.2 日
2019 年	280 人	19.4 日	227 人	66.2%	7 日
2020 年	213 人	28.8 日	172 人	60.2%	6 日



記念写真



誕生会





編集後記



今年は COVID-19 感染拡大の中、当緩和ケア病棟も面会制限の他、病棟閉鎖という事態を乗り越えました。

原稿や作品をご提供いただきました皆様には心より御礼を申し上げます。

また、毎日お花の手入れを行っていただいていた、季節ごとの飾りつけで病室と病棟内を素敵な雰囲気にして下さっているボランティアスタッフの方々にも御礼申し上げます。

今後とも皆さまとの出会いを大切に、スタッフ一同力を合わせていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

令和3年度 編集担当一同



七っ森

Nanatsu-mori

第24号

令和4年2月発行

東北大学病院 緩和ケア病棟

〒980-8574

仙台市青葉区星陵町 1-1

TEL : 022-717-7986

FAX : 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp>

印刷：株式会社 センキョウ